



# 学校だより

子どもの「やる気」を育てます

1月号 令和7年1月8日  
西東京市立保谷第一小学校  
校長 原 之雄  
〒202-0004 西東京市下保谷1-4-4  
TEL042-422-4513 FAX042-424-7117  
<http://www.nishitokyo.ed.jp/e-houyal/>  
e-mail [e-houyal@nishitokyo.ed.jp](mailto:e-houyal@nishitokyo.ed.jp)

保谷第一小ホームページ  
QRコード



## 幸福を感じる力

校長 原 之雄

皆様おそろいで令和7年の新春をお迎えのことと存じます。昨年は、保谷第一小学校の様々な教育活動に並々ならぬご支援を賜り、誠にありがとうございました。本年もご支援、ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、皆さんは、東京都の旧浅草区生まれの脚本家で、一昨年亡くなった山田太一さんという方の名前をご存知でしょうか。数々の傑作ドラマのシナリオを手がけてきた日本を代表する脚本家です。「ふぞろいの林檎たち」というドラマをご覧になっていた方もいるのではないかと思います。その山田さんの著書に「親にできるのは『ほんの少しばかり』のこと」というエッセイ集があります。とても読みやすい本ですが、その根底に人間や家族、社会に対する深い洞察があり、ハッとさせられます。その中の一つ、「幸福を感じる力」で山田さんは概略次のようなことを言っています。

『いまの日本人は知的になりすぎて、ほんのちょっとしたことに幸福を感じる事が難しくなっている。生活の中に不満を見つけ、改善したり、条件をよくしたりすることが積極的な生き方だと考える人も多い。そういう人を貶めるつもりはないが、しかしそれでは何時までたっても「今」は満たされず、幸福にはなれない。何気ない日常に幸せを感じられる人こそがその人生を豊かに充実させていくことができるのではないか。』

そして『細かな日々の中で細かく幸福を感じる能力をもっている親というのは素敵だと思います。そういう親のあり方はもちろん子どもにも反映するでしょう。』と書いています。

かつてある区で、学級担任をしていた折、移動教室の实地踏査での出来事です。本番で予定されている2日間の夕食、朝食のメニューを宿舍の食堂に並べ、それを实地踏査に来ている教員全員で試食する時間がありました。温かいシチューや鮭のソテー、スクランブルエッグ、ハッシュドポテト等、私には何の不満もなく、ただ有難いと感じていました。そんな時、ある学校の教員が手を上げて発言しました。曰く「朝からくどいものが多い、子どもは食が進まない。」「炭水化物が多く、野菜が少ない。バランスは大丈夫なのか。」云々。間違いではないのですが、何ともいえない違和感を覚えました。こんな山の中で、きわめて限られた予算、限られたスタッフで、しかも朝早い時間に温かい朝御飯が食べられるのに……。出されたものをみんなで「おいしいねー」と言いながら食べる方がずっと素敵なのではないか……。さて、保谷第一小学校の子どもたちはどうでしょう。小さなことに幸福を感じる力をもっているのでしょうか。

昨年の夏に遡りますが、とても印象的な光景に出会いました。給食でスイカが出された時のことです。子どもたちは大喜びで、「夏だね」「スイカだね」と言いながら厚い皮が真っ白になるまで食べていました。中にはうれしくて皮まで食べる子も。別のクラスでは、お目当てのおかずをもう一度食べるための「おかわり」の輪ができ、実に楽しそうにじゃんけんをしていました。勝つと本当にうれしそうにお皿に盛ります。また、別のクラスでは、激戦の末、最後の一枚の魚の煮付けを勝ち取った男の子が、負けてしまった女の子の姿をみて、「これ、あげるよ」と気前よく譲っている光景がありました。何という豊かさ、何という幸福感、私まで幸せな気持ちになりました。こんなに素晴らしい子どもを育てている家庭や地域の方々に感謝するとともに、子どもの小さな成長をしっかり見取り、皆で喜びあえる学校でありたいと心から思うのでした。本年もどうぞよろしくお願いいたします。